

災害に強い町作りに貢献できる中学生の育成を目指した防災教育の取組
～自助から共助・公助へ～

船橋市立湊中学校長 杉山 勇康

1 学校の規模及び地域環境

本校は学級数13（うち特別支援学級2）生徒数360名の中規模校である。学区は京葉臨海工業地域の北西部に位置し、JR船橋駅と京成船橋駅に隣接している。校舎は北と西の2方向を海で囲まれた埋立地にあり、東側200mに船橋漁港がある漁師町の学校である。

しかしながら、現在では京葉線の開通をはじめ、湾岸道路の交通量の増大、首都圏拡大によるベットタウン化に伴い、長い歴史を持ち続けた漁業中心の町から、近郊都市住宅型の特色を備えた地域に変化しつつある。漁業を中心とした生活をしてきた昔からの住民とマンション共同住宅に居住する新しい住民とが混在する学区の様相を呈し、学校教育への期待や要望も多様なものとなっている。

学校教育活動に対しては大変協力的な地域であり、12の自治会とそれらがまとまった連合町会が様々な形で学校を支援してくれている。

本校は東日本大震災において、グラウンド全面が液状化し、防球ネットや野球のバックネットが傾いたり、校舎に亀裂が入る被害を受けた。地域も液状化により家屋が傾いたり停電、断水等の被害があった。幸いにも生徒やその家族に犠牲者は出なかったが、船橋漁港に2mの津波が来たことを考えると、東日本大震災を大きな教訓として、安全対策、防災対策を見直さなければならない。

2 取組のポイント

本校は千葉県教育委員会より、「平成24年度 命の大切さを考える防災教育公開事業」の指定を受け、「地震と液状化」という課題で防災教育に取り組んでいる。東日本大震災の経験と中学生という年代を踏まえ、以下の取組のポイントを設定した。

(1) 液状化についての正しい知識を得る。

東日本大震災においては、「液状化」という被害を想定せず、グラウンドに亀裂が入り、水と砂が噴き出してくる光景を呆然と見ていた。まずは「液状化」について理解し、どういう行動をとれば良いかを考えさせたい。【自助】

(2) 学校が避難場所になりえない状況における避難体制の構築。

「液状化」及び「津波」の被害が想定される本校は避難場所及び避難所にはならないことが考えられる（東日本大震災では実際に避難者を受け入れはしたが、他施設に移動してもらった）。生徒の安全を確保するための避難場所の選定や経路の見直しを図る。【自助】

(3) 災害時における中学生がとるべき行動を考える。

保護者のほとんどが共働きで、多くは都内へと出てしまっている地域柄、日中

【地震と液状化】 24年度指定校 ⑤船橋市立湊中学校

の災害では帰宅難民になる可能性が高い。地域にいるのは子どもと老人のみである。その中で一番活躍すべき(してもらいたい)人材は中学生であろう。中学生として何ができるかを考え、実践し、地域に貢献する生徒を育成することを通して、災害に強い町作りに貢献する。【共助・公助】

3 取組の概要

実施時期	計画事項	参加者
4月	担当者連絡会議	学校・市教委 担当者・市防災担当・PTA(地域住民)
5月	第1回避難訓練	学校
6月	担当者連絡会議	学校・市教委 担当者・市防災担当
7月	心肺蘇生法講習	全校生徒対象
8月	船橋市総合防災訓練	有志生徒及び職員
	職員全体研修	全職員
9月	防災学習集会	全校生徒対象
	第2回避難訓練	学校・市教委 担当者
	防災教育講演会	学校・地域
11月	防災授業公開	学校・地域
1月	第3回避難訓練(防災用具講習)	学校・地域
2月	担当者連絡会議	学校・市教委 担当者・市防災担当・PTA(地域住民)

実施時期	計画事項	参加者
3月	まとめ・報告書作成	学校

4 担当者連絡会議

	氏名	所属及び役職
1	高梨 賢次	葛南教育事務所指導室
2	岩田 茂	船橋市教育委員会保健体育課 防犯安全対策室長
3	立原 栄	船橋市教育委員会保健体育課 防犯安全対策室副主幹
4	松本 昇一	船橋市市長公室危機管理課 防災室指導班長
5	久野 和幸	船橋市立湊中学校前PTA 会長・日の出第一町会役員
6	重戸 治子	船橋市立湊中学校PTA 会長
7	杉山 勇康	船橋市立湊中学校長
8	窪田 勝秀	船橋市立湊中学校教頭
9	永井 弘之	船橋市立湊中学校安全主任

5 具体的な取組

(1) 船橋市総合防災訓練への参加

船橋市では毎年8月末に総合防災訓練が行われる。小学校等を会場として地域自治会ごとに参加している。



(簡易担架による救助訓練)

この訓練に生徒を参加させた。「防災」というキーワードで学校と地域をつなぐことが狙いで、中学生がどれだけの活動ができるか、生徒及び職員、地域の人が認識することができた。

(2) 防災学習集会

9月3日、防災学習集会を実施した。内容は教頭による防災に関する講話と「津波から逃げる」というDVD視聴及びワークシートであった。DVDが「釜石の防災教育」の片田敏孝 群馬大学教授の実践がもととなった内容であったため、そこに繋がられるように、「自助」の観点で実践的防災授業推進研修の内容を参考に講話を行った。DVD視聴後、各教室でワークシートを使って、まとめと振り返りを実施した。生徒の講話、DVD視聴の態度もワークシートへの取組状況も良く、「自助」についての考えを深められた集会であった。

(3) 津波を想定した避難訓練

この避難訓練は「命の大切さを考える防災教育公開事業」の事業公開として実施した。県内各地より、うだるような残暑の中、関係各位を始め、参観者にご来校いただいた。

5月の第1回避難訓練ではグラウンドの液状化を想定し、隣接する日の出公園（東日本大震災時も液状化しなかった学校に隣接した公園）への避難を実施した。

その訓練を前提として、第2回（9月実施）は津波警報の発令を想定した避難訓練を実施した。校舎屋上に避難する選択肢もあるが、本校が3階建てであることと、液状化した地盤に建っている校舎に避難する不安から、学校の北800mにある船橋市役所（11階建て）への避難を実施した。

①訓練の流れ

地震発生 → 教室内での1次避難 → 2次避難指示放送 → 日の出公園への2次避難 → 2次避難完了 → 津波警報確認 → 市役所への3次避難 → 学校へ帰校 → 各学級での事後指導



(市役所前の訓練の様子)

②訓練の状況

生徒には課題を与えて訓練を実施した。

- ア 無言で、できる限り急ぐ。
- イ 市役所までの移動中で、危険な物や場所、災害時に役に立ちそうな物や場所を確認する。(事後指導で確認)

避難場所は市役所11階の大会議室としているが、今回は市役所の周囲を回って、そのまま学校に帰校する計画を立てた。生徒は整然と速やかに行動することができた。事後指導において、課題イについてワークシートに記述させたが、熱心に記入する様子が見られ、意識の高さが伺えた。

危険な物、場所	・・ビルのガラス
	自動販売機
	高速道路の高架
役立つ物、場所	・・自動販売機
	コンビニ
	消防署

(事後指導ワークシートより)

【地震と液状化】 24年度指定校 ⑤船橋市立湊中学校

③課題

予想よりも時間がかかってしまった。市役所到着まで27分の所要時間であった。800mの距離を平常の状態（信号待ち等）の中で360名の生徒の移動はやはり難しい。津波警報発令から何分で津波が到達するかにもよるが、避難場所としては再考の必要がある。また、経路に高速道路が横切っている。阪神淡路大震災の時のように、もし道路が崩落した場合は市役所の避難は不可能になる。この点からも避難体制の再構築が急務であることが浮き彫りとなった。

④成果

生徒の避難訓練に対する意識を高めることができた。防災学習集会から避難訓練を短期間で実施したことにより、「自助」の意識が高まり、教室内の1次避難から無言で行動することができた。

と同時に学校の取組を地域にアピールできたことも大きな意味を持っている。「釜石」でも、そうであったように、中学生が率先して避難する姿で、地域住民が避難を始めることは実証済みであり、今回の避難訓練も地域自治会に実施の連絡はしてあったが、学校全体が校外を移動している姿を実際に地域に見せることに大きな意味があったと考える、



(訓練表示札)

液状化という被災を受けた地域だけに、防災に対する意識は高く、中学校が防災教育に取り組んでいることを理解してもらい、今後の地域連携に繋げたい。



(避難の様子)

(4) 防災教育講演会

～地震と液状化について～

「命の大切さを考える防災教育公開事業」の第2回公開として、銚子地方気象台 防災業務課課長 佐々木泉氏を招いて、「地震と液状化について」という演題で講演をいただいた。

(講演会の様子)



【地震と液状化】 24年度指定校 ⑤船橋市立湊中学校

今回は地域自治会長に依頼をして、回覧板で住民にも参加を呼びかけたところ、多くの参加者が本校体育館に集まった。



(熱心に聞く地域参加者)

講演内容は中学生には大変難しいものだったが生徒は真剣に聞いていた。参観者からの感想も、「難しいが、ためになった。」という声が多かった。液状化の仕組みを理解することで、どういう対応や備えをすればよいかということを学習しようという狙いであったが、仕組みは「科学・地学」の学習であり、他の地震被害と違って、その対応や備えについては学習しにくいと感じた。外部講師を依頼する取組は事前の打ち合わせがとても重要である。

しかし、気象庁が発する様々な情報について、なんとなく理解していたものを、ちゃんと知ることができたのは大きな収穫であったといえよう。

(5) 防災教育授業

「命の大切さを考える防災教育公開事業」の第3回公開事業として実施した。授業参観及びPTAバザーに合わせて設定したため、多くの保護者の参観があった。また、今回も地域自治会にバザーに併せて事業公開案内の回覧を依頼し、地域住民の参観も募った。土曜日の公開であったため、多くの参観者が見

られた。授業は1学年1クラス、2学年1クラスの2展開で実施した。

①展開1

「災害スケッチプランを作ろう」 学 級 1年C組 授業者 永井弘之 教諭	
ねらい	これまでの「自助」の学習から、今回の学習を通して、自らの安全が確保できた後に、仲間とともに「中学生としてできること」を考えさせ「共助・公助」へと視野を広げる。
指導目標	災害時に身の安全を確保した後に、中学生として仲間とともに地域に貢献できることを考え、その計画作りをする。
展開	導入 ・避難場所の確認 展開1 ・避難後の行動を考えさせる 依頼されたことやる 自ら率先して行動する。 ・個々にできることを考える。→発表 展開2 ・一人では無理でも仲間と一緒にできることを考える(グループ学習) 特技・特性を生かした行動プランを立案 →資料作成 (次時 発表)
まとめ	・行動プランを作る意義について

この授業は学級活動の位置づけでおこなった。より具体的な行動プランを、自分や仲間の個性・特性(声が大きい、足が速い・力持ち等)を踏まえて考えることで、本当にできる行動を考える防災教育の側面とクラスの仲間について知る学級指導の側面もある。授業では参観していた保護者も一緒になって行動プランを考える姿も見受けられ、家庭及び地域の防災意識の高まりも感じられた。生徒たちも積極的な取組が見られ、資料作成にも熱心であり、次時のグループごとの発表に期待ができた。

②展開2

「もし南海トラフ巨大地震が発生したら」 学 級 2年A組 指導者 田崎俊介 教諭	
ねらい	南海トラフを震源とした巨大地震が発生したとしたら、本校学区ではどのような被害があるかを、データを基に考え、その備えについてまとめる
指導目標	将来、巨大地震が発生することを前提に、本校学区ではどのような被害が想定されるかを知り、中学生としてどのような備えをしておくべきかを考える。
展開 導入 展開1 展開2	・東日本大震災の振り返り ・学区の地形の理解 ・南海トラフの確認（既習事項） ・南海トラフ巨大地震の想定（新聞記事） ・地震の発生状況を設定し、どんな被害が起るかをデータを基にグループごとに予想する。学区内で地域を割り振る。 → 発表
まとめ	とらえた被害想定に対する備えを考える。 (次時の予告)

この授業は理科の教科指導の位置づけで実施した。2012年4月1日付朝日新聞の記事を用いて「南海トラフ巨大地震」の船橋の状況を確認し、地形図から被害想定をさせた。難しい課題であったが、やはり液状化被害のあった地域に住む生徒たちだからであろう、積極的に学習に取り組む姿が見られた。

③参観者の感想

- ・子供たち自身に自分の問題として防災を考えさせる授業でした。このような取組が、いざという時に命を守ることに繋がると思います。
- ・日頃から災害が起こった時に自分たちがどんな状況に置かれるか、その時に何ができ

るのか、大人たちもそれほど真剣に考えたことがない、という人がほとんどだと思います。今日の授業ではよく考えていたと思います。前もって考えておくことで、被災時のパニックは少ないのではないかと思います。

- ・こちらは液状化の被害が想定されるということで保護者も子供たちと同じように被害を想定している姿が見られました。地域が一緒になって取り組んでいかななくてはならないのが防災だと思います。

5 成果と課題

本校の防災教育の取組、「命の大切さを考える防災教育公開事業」は、まだ途中でであり、この後、第3回避難訓練で防災用具講習会（簡易トイレの組立、発電機の組立等）を地域とともに実施する予定（2月）である。したがって、「成果」も「課題」もこれからである。

現段階でのまとめにはなるが、東日本大震災の教訓から「想定外」を「想定」することが必要だということである。

震災直後は津波の際の避難場所として、一番近く高層な公的機関である市役所を考えたが、訓練の結果は時間がかかりすぎるということがわかった。それではどうするか、という試行錯誤をしながら、生徒の避難経路の設定や安全確保をすることが必要である、ということである。学校における防災はP D C Aサイクルが大切であり、生徒に対する防災教育も、教室内の学習だけで終わることなく、行動すること（D o）の場面設定が重要になってくる。

「安全・安心な学校」を目指し、今後も防災教育に取り組んでいく決意を新たにしたい、今年度の実践であった。